

ヘルマン・ヘッセのゆかりの地を訪ねて

田 中 博

はじめに

論叢第8号に報告した後も、出来れば、その続報をと念じ続けてきました。幸いにも、1982年、1983年の夏期休暇のほとんどを西ドイツ、スイス、イタリア、等西ヨーロッパ五ヶ国で、研修の旅を続けることが出来ました。長期休暇のお許しを下さった学園とご援助下さった人々に感謝を最初に申し上げます。

外国の人々を理解し、その文化を知るということが、どんなに困難なことかは、かの地に行けば行くほど深くなり、追いかければ、追いかけるほど遠くへ行ってしまう幻のように思えてはなくなってしまいます。それでも、何かしら感じ、また見たまを記録しておくことによって、次回の踏み台になることを願って、ささやかな記録を書き留めておくことにします。

(1) シュヴァーベン地方

今、私の手元に“Die 7 Schwaben” Land der Dichter und Denker というタブロイト判の観光パンフレットが在ります。1983年8月の西ドイツ、エスリンゲンのツーリスト・インフォメーションで手に入れたものですが、このパンフレットタイトルに示されているように、西ドイツの中でも多くの詩人や思想家を輩出した地方が、このシュヴァーベン地方なのです。日本人にも知られている名前を記してみると、シラー、メーリケ、ヘーゲル、ヘルダーリン、等々すぐに数えあげることが出来る。この地方は「黒い森」シュバルツ・バルトとしても近年、日本の観光客にも知られるようになった。南の入口は有名な大学街、フライブルグ市で、北の入口はシュトゥットガルト市が大きな都市であろう。そのシュトゥットガルトから車なら一時間程の所に、ヘルマン・ヘッセの生れたカルプが在る。このカルプのことは前回の報告に記したので省略し、1982年7月と1983年8月にシュトゥットガルトを中心にして、旅をした、エスリンゲン・チュービンゲン・マールバッハのことを書きとめておこう。ヘルマン・ヘッセは、牧師の子として、1877年7月2日に、カルプに生れた。このシュヴァーベン地方の知的エリートの進む道は、マウルブロン神学校からチュービンゲン大学へというコースときまっていた。黒い森のはずれのカルプの牧師という貧しいけれど知的エリートである家族の期待に答えて、ゲッピンゲンの高校で受験勉強をして、見事にマウルブロン神学校に入学したが、半年で、この学校から逃げ出すことによって、彼の正規の学校教育は終りを告げるようになった。そのいきさつは、「車輪の下」という彼の作品に描かれている。

シュヴァーベン野や森を愛し、その中で孤独を想ったのは、すでにこの頃からだったにちがいない。その孤独は近代人の孤独として二重像になり、彼の小説の主要なテーマにまで高められたと思う。「デミアン」の表紙に書かれた「わたしは、自分の中から出てこようとしたところのものを生きてみようと欲したにすぎない。なぜそれがそんなに困難だったのか。」神のもとにあった人間が、自我にめざめた時、近代の人間の自己肥大が始まり、苦悩の生を生きねばならぬことになったと思う。1892年、マウルブロン神学校を中断した、ヘッセは再び、神学校に戻ることはなかった。まさに青春のシュトルム・ウント・ドラングの中で彼の家族も、そしてもち論ヘッセ自身は神経障害=深い孤立感にゆれ流される数年を過ごすことになる。

私は1983年8月3日、シュットガルト中央駅前のホテルに前日から泊りこんでいた。100年ぶりの暑さという異常気象に見まわられていたドイツも、昨夜の雨で今朝は少し涼しさを取りもどした。それでもまだ平年よりは気温が高い。やはり前年1982年の夏、ここシュットガルトからチュービンゲンに出て、旅行日程の都合で、通りすぎてしまったエスリンゲンとマールバッハへ今年こそはと思って、出てきたので、朝食すませると早速、中央駅に出て、S Bahnの4番に乗って、マールバッハに出かけた。九大の棚瀬さんから彼の論文と共に送ってもらった *Marbacher Magazin* 12/1979 ヘルマン・ヘッセ特集号はシラー国立博物館から発刊されたもので、その意味で *Marbach am Neckar* は訪ねるべき土地であった。シュットガルトの市街地を出ると全くの田園風景となり、40分程で、終点のマールバッハに着いた。ネッカー川は深い谷になり、その丘の上にマールバッハの街は在る。訪ねるシラー国立博物館は駅から歩くと20分程かかる街のはずれの丘



シラー博物館（マールバッハ）

にあり、裏はネッカー川が深い底となっている。前庭には小さな公園があり、シラーの立像がその正面をながめている。雨の降り出しそうな空模様だ。正面を入れて左手奥に、ヘッセの資料展示室があり、ヘッセの絵や本にまじって、各国翻訳本の中に新潮文庫の本が日本語例として、展示されていた。又、ここでは声のライブラリーがあり、こころみにヘルマン・ヘッセとトーマス・マンのものを試聴してみた。ヘッセの中味は、>In Sand geschrieben< >In Auto über den Julier< >Bericht des Schülers< >Skizzenblatt<。マンのものは、Aus >Tonio Kröger< (Der Aufgang des 2. Kapitels) この二人の声、言葉にはかなり明確な差があって、興味深かった。ヘッセはくぐもった、南ドイツ人のなまりの残る、ゆったりとした朗読であり、それに対して、マンは、北ドイツの出身らしい、やや軽い清音で高質なひびきを持っている。肉声に現われる、生れや、文学の特質まで含まれているようで、一人がてんをして、イヤフォンをもとにもどした。となりの文学館を少し見せてもらって、シラーの家へまわった。午後は、シュットガルトへ一度もどり、再びS 1に乗りかえて、エスリンゲンにむかった。望んで再び、カンシュタットの高校も11ヶ月しか続かなかったヘッセは、1893年10月、父のすすめで、エスリンゲンのマイアー書店に入ったが、三日目には、早くも逃げ出してしまった。もっとも危険な日々をすごした時期である。小雨の降り出したエスリンゲンの街は、なかなか美しい街である。ネッカー川の支流の中州のあるあたりは、やがて四年近くを書店員としてつとめることになる同じネッカー川

畔のチュービンゲンの中州の風景に少し似ているのではないかと思った。

たった二、三日で逃げ出したマイアー書店は今が無い。小雨の為に人通りの少ない古い石だたみの道を旧市街に沿って歩きまわった。美しくととのった古い建物から甘いケーキのおいだけが妙に印象に残るエスリンゲンにわかれをつけて、再びシュットガルトのホテルにもどる頃には、本格的な雨になった。シュットガルト駅と向いあっている六階の部屋は、ドイツ式の窓だから騒々しい車の音をしゃ断してしまつて静かだ。長旅の疲れでふとベッドでうとうとしてしまった。今日訪ねた、エスリンゲン時代のヘッセは、彼自身の著書にある「くちびるの上には小さなひげがはえた。私はすっかりお



エスリンゲン市旧市街

となっていたが、まったくなすところを知らず、目的がたたなかった。……私は毎日反抗した。おそらく自分は狂っているのか、ほかの人たちとは違うのか、と私はたびたび考えた。」¹⁾ エスリンゲンのマイアー書店を脱走したヘッセは3日後にこのシュットガルトで、父に保護されるといふ、まさに不幸な疾風怒濤のまただ中であつた。故郷カルブに戻つた後、1894年6月から1895年9月までは、カルブのペロット工場で、見習工をした。ようやく落ち着いたヘッセは、1895年10月17日、チュービンゲンのヘッケンハウアー書店に見習店員として勤めることになった。チュービンゲンは1477年に創設された大学の町として、この地方の文化の中心地として知られている。ヘッセもマールブロン神学校を卒業して、ここの神学部へと進むコースにあつたことは、前述した通りである。大学生ではなく、本を扱う見習店員としての再出発は、複雑なものを含んでいたにちがいない。私は、1982年7月28日、ハイデルベルクの宿を出て、途中、シュットガルトを経由して、家族と共にチュービンゲンをはじめて訪れた。ハイデルベルグの古城の下を流れるネッカー川は、マールバッハ、シュットガルト、エスリンゲン、そしてこのチュービンゲンを流れている。シュットガルト駅からは、もうずいぶん支線を走って列車は、チュービンゲン駅に着いた。想像していた以上に田舎田舎した駅には、インフォメーション（ホテル予約用のもの）がみつからない。結局、エーベルハルト橋のそばにある市観光案内所まで行かねばならぬことが解つた。そこで旧市街の中心地、お城の登り口にある Am Schloß Hotel に宿をとつた。ネッカー川にかかるエーベルハルト橋の左中央から中州に下りれるようになっていて、そこには見事なプラタナスの大木の並木道がある。橋を渡り切った左手のネッカー小路の石だたみの道を、大きなスーツケースを引っぱりながら歩いて登りつめるあたりに、シュティフト教会、大講堂が在る。教会通りを左手に折れると、シュティフト教会の正面に、小さな、ヘッケンハウアー書店がある。教会通りはすぐに市役所につきあたる。立派な彩色のある大変古い市役所の裏手に私達の宿はあつた。



チュービンゲン市役所

ネッカー川から急な傾斜のある丘の上にあるホテルのレストランのテラスは、旧市街のながめが見事である。

大都会では、ヨーロッパでも、ほとんど教会の鐘が余りきこえなくなってしまったが、ドイツの田舎では、今、豊かな音色の教会の鐘が、夕べの祈りをこめて、あちこちから谷間にある旧市街の建物のあちこちに反響して、すばらしい音の協奏曲をかなでている。屋外の眺めの良いテラスで、シュペツエレ (Spätzle) くうどんを平たく短かく切ってゆでたもの＝シュヴァベン地方の食物＞の付いた肉料理を夕食にとって食べた。途中から急に気温が下って、うすい霧が出てきた。古いメランコリックな街並みは、一層孤独に見えた。

はかない青春 (Jugendflucht)

疲れた夏が頭をたれて、
湖に映った自分の色あせた姿を見る。
私は疲れ、ほこりにまみれて歩く、
並木路の影の中を。

ポプラの間をおどおどした風が吹く。
私の後ろの空は赤い。
私の前には、夕べの不安と、
——たそがれと——死とが。

私は疲れ、ほこりにまみれて歩く。
私の後ろには、青春がためらいがちに立ちどまり、
美しい頭をかしげ、
これから先はもう私といっしょに行こうとしない²⁾。

ようやく落ち着きをとり戻し、自から求めて書店で働き出したヘッセは、その長時間の肉体労働の後の数時間を、ゲーテをはじめ、多くの作家や詩人の作品を読むことについやした。シュテイフト (神学部) へも本のことで出入することもあった。彼の勤め先のヘッケンハウアー書店から、シュテイフトまでも数百メートルの位置にあり、同じネッカー川畔には、かのヘルダーリンが狂気の故にとじこめられた、ヘルダーリン塔もすぐ近くにある。

この旧い大学街の、チュービンゲンの大学や大学生の知的環境の中で、書店員という、アウトサイダーであるヘッセは、青春のあてのない反抗と反乱を除々に、詩作へ、文学へと結実させるべき準備をおこなっていった。1898年の秋に彼の処女詩集「ロマン的な歌」(Romantische Lieder,



ヘッケンハウアー書店の古書部、後方にヘッセのコーナーが在る

1898. Pierson, Dresden) は自費出版に近い形で出版された。翌年「真夜中後の一時間」(Eine Stunde hinter Mitternacht, 1899. Diederichs, Leipzig) という散文集が出版された。このチュービンゲン時代の二冊は、まだ多くの人に知られることはなかった。この二冊目の出版によってヘッケンハウアー書店と店員ヘッセとの関係にひびが入っていった。1899年秋、スイス、バーゼルのライヒ書店へ移るきっかけとなっていった。

夏期休暇ですっかり静かなチュービンゲンのホテルで一夜すごした私は、シュティフトやシュティフト教会、大講堂、ヘルダーリンの塔や旧市街を散歩して歩いた。まだ石だたみの坂を登り下りしてすがすがしい夏の朝をすごした後、ヘッケンハウアー書店を再度訪れた。私の記憶している当時の写真からみると、今、目にしている書店は全くの田舎の一書店になっており、本以外のものも発売していて、少しがっかりされた。店の人にたのんで左手にある古書部に入れてもらった。階段を登って2階にある古書部は、かなり専門的な本をならべていて、やっと安堵した。ヘッセコーナーでは、ヘルマン・ヘッセの朗読を録音したレコード“Hermann Hesse liest”を買った。私は、はじめて詩人の声をきいた。

おわりに

シュヴァーベン時代、ヘッセの言葉を借りれば、鳥が卵のからをわる時代を追って歩いた、チュービンゲンまでの報告をして、一区切りをつけたいと思う。ヘッセが作家として活躍するスイス時代は、次号で報告をする予定です。

注

- 1) 「デミアン」 H. ヘッセ著 高橋健二訳 S. 119, 新潮文庫
- 2) 「孤独者の音楽」ヘッセ全集 10 高橋健二訳 S. 120, 新潮社

参 考 資 料

- 「ヘッセ」 B. ツエラー著、井広恵治訳、1981、理想社
「ヘルマン・ヘッセ——危機の詩人——」高橋健二著、1974、新潮社

ヘルマン・ヘッセ年譜（本文関係分）

1877年7月2日		シュヴァーベンのカルブに生まれる。
1881年	4才	スイスのバーゼルに移る。
1886年	9才	カルブにもどる。
1890年	13才	神学校受験のため、ゲッピンゲンのラテン学校にはいる。
1891年	14才	マウルブロン神学校に入学。
1892年	15才	3月神学校を逃げ出す。5月退学、自殺未遂。11月カンシュタットの高校に入る。
1893年	16才	10月、高校退学。10月末、エスリンゲンで本屋の見習、三日で逃げ出す。
1894年	17才	カルブの町工場の見習工となる。
1895年	18才	10月、チュービンゲンのヘッケンハウアー書店に入る。
1899年	22才	「ロマン的な歌」「真夜中後の一時間」刊行。秋、バーゼルのライヒ書店に移る。